授業科目名(英文名) ／Course Title	作物生産技術学		
担当教員(所属)／Instructor	高橋　行継(農学部)		
授業種別／Type of Class		時間割コード／Registration Code	A000175
開講学期曜日時限／Period	2016年度／Academic Year 前期／First semester　水/Wed　1,　水/Wed　2	単位数／Credits	2単位
科目等履修生の受入／Acceptance of Credited Auditors	受入可		
連絡先（研究室、電話番号、電子メールなど）／Contact	高橋　行継(電話０２８５－８４－１２０６、 ｅ－ｍａｉｌ：ｔａｋａｈａｓｈｉ@ｃｃ．ｕｔｓｕｎｏｍｉｙａ－ｕ．ａ		
オフィスアワー（自由質問時間）／Office Hours	高橋　行継(前期は毎週月・木・金曜日、後期は水・木・金曜日の昼休み（１２：２０～１３：１０）。 ただし、所用で不在の場合もあるので、事前にメール等で連絡、確認のこと。上記時間帯に限らず適宜対応も可能。)		

授業の内容／Course Description	前半は土地利用型農業の主要作物である水稲、麦類、ダイズ、ソバの生産技術を中心に歴史的変遷、今後の技術開発や展望について説明する。後半は栽培計画、農業気象災害、雑草・病害虫防除技術、有機農業、農業技術開発、種子生産など研究サイドのみならず、現場サイドからも光を当てて紹介する。
授業の達成目標／Course Goals	水稲をはじめとする普通作物の栽培技術研究の歴史は古く、これまでも様々な技術が生み出され、収量・品質向上等に大きく貢献してきた。技術研究は時代の要請を受けて、方向性を変えつつ進んできている。しかし、優れた技術でありながら現場に受け入れられないものや、普及が不十分なまま忘れ去られていってしまうものも数多い。この原因は何か、現場が求め、農業生産に貢献できうる技術のあり方を考え、卒業研究のテーマ設定の際のヒントになるようにしたい。
学習・教育目標との関連 ／Educational Goals	生物資源学科の目標である生産現場における農業技術の現状を理解し、問題点を抽出・解析し、改善・解決法の提案ができる能力を身につける点で深く関連している。さらに、食料等の人間生活に必要な生物資源の持続的生産を理解し、説明することができる能力等を習得する点においても関連している。
前提とする知識／Prerequisites	普通作物生産に関連する技術を幅広く扱う授業であるため、きわめて専門性の高い知識までは必要としないが、時には農業経営学までを含む農学の広範な知識が求められる。中でも作物学Ⅰ、肥料学、植物病理学Ⅱ、農業生産環境学、植物保護学などの専門教育科目を履修しているか、それらに関する知識を有していることが望ましい。これらの講義を開講年次や時期等の関係で未受講の場合には、本講義を聴講後に履修することによって新たな視野が開けることも十分に考えられる。
関連科目／Related Courses	普通作物生産に関連する技術を幅広く扱う授業であるため、きわめて専門性の高い知識までは必要としないが、時には農業経営学までを含む農学の広範な知識が求められる。中でも作物学Ⅰ、肥料学、植物病理学Ⅱ、農業生産環境学、植物保護学などの専門教育科目を履修しているか、それらに関する知識を有していることが望ましい。これらの講義を開講年次や時期等の関係で未受講の場合には、本講義を聴講後に履修することによって新たな視野が開けることも十分に考えられる。
授業の具体的な進め方 ／Course Methodologies	毎回、授業の開始時に資料を配付する。配布した資料とスライドを用いて講義形式で行う。出席と授業内容の確認や、問題提起に対する受講者の考えを求めるためのレポート用紙を授業の中程（概ね9:25前後)に配布する。授業終了後にレポートを完成させ、提出して毎回の授業を終了する。
授業計画（授業の形式、スケジュール等） ／Class Schedule	１オリエンテーション、総論 ２水稲育苗 ３水稲移植と直播栽培 ４水稲施肥、水管理 ５水稲収穫、乾燥調製 ６麦類生産技術（１）播種、施肥 ７麦類生産技術（２）栽培管理、収穫 ８ダイズ、ソバ生産技術 ９農業気象学と農作業学からみた栽培計画 10農業気象災害と対策 11病害虫防除と殺虫・殺菌剤開発の現状 12雑草防除技術と除草剤開発の現状 13食の安心・安全と有機農業のありかた 14農家が求める栽培技術と技術の研究開発の現状と普及方法 15普通作物の種子生産の現状と問題点、全体のまとめ
教科書・参考書等／Textbooks	配布する資料を基に講義形式で解説する。実学中心であり、生産現場の情報を盛り込んだ内容のためふさわしい教科書が数少ない。このため教科書等の指定はしないが、農文協から発刊されている農業技術大系は、適宜更新されるスタイルを採っており、参考になる部分が多い好書である。また、ホームページによる国や都道府県の農業試験研究機関、大学の研究成果も検索をすることで、生産現場に近い有用な情報を得ることができる。